

家族と共にありのままに暮らす

2005年から、台湾の高齢者の生きがいと世代間関係というテーマで、有料老人ホーム、特別養護老人ホーム、デイケア、老人大学等集う高齢者へインタビュー調査を実施してきた。

■「同居すること」——親子の面子

この調査を通じて一番印象深いことは、台湾の高齢者にとって家族と暮らすということは、とても重要な意味をもつということだった。たとえば、有料老人ホームに入居している高齢者は、「家族がいるのにどうしてここに暮らしているの?と思われるのがとってもイヤ」とか「私は、(家族がいるけど)自分!でここを選んで生活しているの」と言う。家族からすすめられたかもしれないことや家族と同居できない理由はできるだけ語らず、自分で選択したことを強調する。「一ヶ月ごとに子供たち5人の住まいをまわって暮らしているの」と実際に誇らしげに話をする高齢者も多い。今後、施設に入所する可能性についてたずねると、「そんなことはない。息子の面子もあるんだから」と高齢者はいう。台湾では、外国の介護労働者も多く、そのほとんどが家庭内で雇用されているという。それは子供たちも自分の面子を考えて、家庭で介護者を雇って両親をみてもらうことを好んでいることの現れであろう。台湾の内政部社会司へのヒアリング調査からも、施設内の入居状況は約70%で、3割のベッドは使用されていない状況が明らかになった。その理由は、台湾の高齢者や家族は施設入所を好んでいないからであった。また台湾には日本のような介護保険制度がないために、施設入所に伴うコスト面の問題もある。



台北市南港区仁福里・里民活動中心で高齢者に話をきく筆者

■「生きがい」とは?

2007年9月に高層の国民住宅の階下にある台北市南港区仁福里・里民活動中心(活動センター)を訪問した。ここでは2名の男性高齢者に話をきいた(写真)。ここでは、20畳くらいの広さの部屋で、特別何かを提供するような施設ではない。里長と呼ばれる人が住宅の生活環境を整えたり、管理したりする役割であり、さらにお年寄りの話し相手になったりしている。高層の国民住宅には、一緒に住む子供たちが共働きのため、昼間は一人の高齢者が多いという。高齢者は散歩やおしゃべりのためにこの活動センターにおりてくる。

ちょうど私も、昼前のお茶とおしゃべりのためにおりてきていた2人の高齢者に話をきくことができた。この2人の高齢者の一日は、早朝近所の公園で太極拳をやり、朝飯まで集まった人々とおしゃべりをして、昼間はまた自宅周辺を散歩したり、テレビをみたり、仲間とお茶を飲みながら他愛もない話をする。孫の帰りを待ち、家族で囲む夕べを楽しみにしている。特に老人大学に行くわけでも、ボランティア活動をするわけでもない。まさに自分の老いを感じ、受けとめながら家族と共にあるがままに暮らしていた。彼らに「生きがいとは何ですか」と

きくと、決まって「そんなこと何にもないよ。もう年寄りなんだから!」と苦笑しながら、でも楽しそうに子供や孫のこと、毎日の暮らしについて話してくれる。厳しい時代を生き抜いてきたその人生やいまの現状を肯定し、あるがままに生きることそのものが、生きがいであると感じた。

■ 深刻な少子化と今後の課題

しかしながら一方で台湾では子供との同居率が70.6%(1989年)から、57.2%(2005年)になっている。表1のように高齢化が進み、さらに出生率は1.15(2006年)と少子化が急速に進んでいる。家族規模の縮小化や女性の地位向上や就労率の高まりなどを背景に、世代間関係が変化している中で、社会でお年寄りを支えていくという介護の社会化を広め、在宅ケアの人材育成とともに、魅力的な施設のあり方をも検討することが求められるだろう。

(鶴若麻理)

■ 表1：台湾における少子高齢化

年	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
TRF (合計特殊出生率)	2.83	2.52	1.88	1.81	1.78	1.68	1.40	1.34	1.24	1.18	1.15	1.15
65歳以上人口 (高齢化率)(%)	3.51	4.29	5.06	6.22	7.64	8.62	8.81	9.02	9.24	9.48	9.74	10.00

出典：内政部戸政司(2007.5.14)、内政部統計處(2007年2月)